

鳥取県での取り組み

オリエンテーリング普及研修会 2012年8月4日 鳥取県

村越 真



スコア0で、キャンパスを懸命に走る鳥取の高校生。男子チームは満点をたたき出した

も暑い。その暑さの中で脳みそを沸騰させながら大学キャンパスの地図調査。事前に学内の1:3000配置図を入手し、調査は最小限の修正で済ませるつもりとはいえ、大学キャンパスは予想以上に広い。山あり、急傾斜あり。おまけに森の中に前方後円墳が2基もある。さらに、キャンパスマップは作図の手間が尋常ではない。建物の記号を切り抜いては、ピロティに変更する。植え込みを一つ一つ作図する。気づくと18時を回っていた。

山西さんが時間を気にしている。日本海に沈む夕日を僕に見せたいらしい。車で近くの海岸に直行すると、ちょうど太陽が水平線にかかる時だった。太平洋岸では決してみられない海に沈む夕日を鑑賞し、その後は日本海のおいしい海の幸をつまみに、山西さんの故郷鳥取を堪能させてもらった。



1:3000配置図を元に講習前日に作成したキャンパスプリントマップ。このような地図を残すことが、地域でのオリエンテーリング活動をスタートさせるよいきっかけになるだろう。右下には前方後円墳があるのが等高線で分かる

鳥取県はJOA（日本オリエンテーリング協会）会長の山西氏のふるさと。県協会空白の鳥取県で新たな試みが始まった。

2012年8月4日（土）鳥取県
オリエンテーリング普及研修会



久しぶりの故郷の大学でオリエンテーリングを楽しむ山西JOA会長

高校生・鳥取に集う

8月4日、鳥取大学でオリエンテーリングの普及のための研修会を行った。関係者を除けば5名も集まれば上出来というのが正直な思いだったが、蓋をあけてみると20名を超える参加があった。しかも半数以上が高校生。彼らは何を求めてこの研修会に参加したのだろう。不思議に思って、今回の研修会の開催準備をしてくれた、山西先生の教え子である鳥取大学の関先生に問い合わせしてみた。その結果、高大連携の中でつながりのあった兵庫県の村岡高校の地域創造類型に声をかけたところ、学類あげて参加してくれたということだった。それならば、オリエンテーリングを体験的に理解するとともに、そのイベントとしての可能性を考えるとという流れで、研修をデザインできそう

鳥取大学キャンパスマップ

僕が鳥取に着いたのは、8月2日。第一印象は「暑い!」。フェーン現象に見舞われる日本海側は、時に太平洋より

地域普及のモデルケース

8月4日の講習内容は、表のとおりとした。まずはオリエンテーリングの特色について簡単に説明した後、クイック0、簡単な練習のためのフリーポイント、そしてキャンパス全体を使ったスコア0を、前日作った地図を元に実施した。クイック0は、体育のゲームでも活用可能なことを強調したが、アルペンスキー部の顧問の先生が、「これはアルペンスキーの練習に使える」と喜んでいる。アルペンスキーでは、急速なターンができる脚力とともに、二つ先の旗門を見る目力が要求される。確かに、コースの空間的イメージを素

早く展開することがかぎとなる点はそつくりだ。

スコア 0 は、キャンパス全域に点数をちりばめた。30 分ではごく一部しか回れないだろうと思って 40 分にしたら、男子 1 チームが最後まで走り続け、35 分でゴールされてしまった。山間部の高校生は元気だ。

最後に、「今日やったオリエンテーリングを活用して(あるいはバリエーションにして)、何らかのイベントを行うとしたら、①誰を対象に、②何を狙いとして、③どんな方式で、実施するか、そして④キャッチコピーは、というワークショップを行った。荒削りだが、地域創造を勉強する高校生らしいアイデアや、楽しいキャッチコピーが出た。彼らがアイデアを形にするプロセスを、地域学部の大学生や年齢のオリエンティアがサポートしている光景はほほえましかった。

その他にも関先生の声かけで、教育委員会が所管する研修所の方も、研修のプログラムのヒントを得たいということで参加されていた。核となる地元の方、適切な人たちへのアプローチ、そして実技と座学のバランスとれた提供、活動のベースとなる地図。今回の講習はこうした要素がうまく組み合わせ、地域普及の一つのモデルケースとなるものだろう。鳥取では、山西さんの働きかけやトレイル 0 の櫻内さんの努力下、協会成立まであと一步のところまで来ている。地元の関先生も関心を示してくれたし、実は東北大学でマッパー経験のある教員もいるという。これまで協会のなかった鳥取だが、その豊かな自然を活かしたオリエンテーリングの展開が盛んになることを期待するとともに、オリエンテーリング界でサポートしていきたいものだ。

講習会のスケジュールと内容

10～11 時

オリエンテーリングの特長・魅力

スライドや TV 番組を視聴しながら、オリエンテーリングの特長や魅力について説明

11～12 時 クイック 0

構内の芝生で、「どこでも気軽にできるオリエンテーリング」としてクイック 0 の実演、体験。

13～15 時

フリーポイント・スコア 0 体験

地図やコンパスの簡単な紹介の後、まずフリーポイントで地図やフラッグなどに慣れてもらった後、40 分のスコアオリエンテーリングを実施。

15～16 時 ワークショップ

今日体験したオリエンテーリングを活かしたイベントを考え、①対象、②狙い、③実施方法、④キャッチコピーの 4 項目を考える。その後発表と公表

(村越 真)



高校生とオリエンテーリングの熟達者を結ぶワークショップ。ささやかな inspiring generation を実感した

山西哲郎:自然流ランニングのふるさと

今回の講習会開催場所鳥取は JOA 会長山西哲郎さんのふるさとだ。山西さんと言えば、市民ランナーという言葉がようやく市民権を得ようとする 1980 年代、その理論的支柱となった市民ランナーのカリスマでもある。当時では珍しかった自然の中で走ることで、強くたくましいランナーになるというのが山西さんの持論だ。その後マラニック、そしてトレランへと、自然の中でのランニングは日本的な展開を遂げた。山西さんはその後も自然の中でのランニングを学会の講演会などでもよく取り上げ、僕もオリエンテーリングという自然の中を走る種目の出身者として、何度か講演に呼ばれた。

山西さんの実家は、日本最大の鳥取砂丘から走ってほんの 20 分のところにある。講習会の当日は、朝 7 時鳥取砂丘集合で、砂丘での自然走から始まった。昨日は 12 時すぎまで地図の準備で起きていたので、6:40 分の集合はやや辛い。

山西さん自身 1990 年代には、この砂丘を舞台に、近くの旅館を買い取って、自然走の合宿を毎年開催されていた。砂丘の入り口に着くと、靴を脱ぐ。裸足で走れと、山西さんが言う。均質な美しい砂の感触が気持ちよい。「ベアフットランナーの聖地!」そんなマーケティングのキャッチコピーが頭に浮かぶ。傾斜 30 度高さ 30m の砂の壁をダッシュ!あっという間に乳酸がたまる。おまけに蟻地獄のように、一歩進むと半歩引き戻される。3 本でぐったり。山西さんは若い頃は 30 本やったそうだ。関節にも筋肉にも負荷を掛けすぎない高強度のインターバル。若いころの僕にとってもカリスマであった山西さんの原点をつぶさに見た気がした。



自然流ランニングのカリスマ山西哲郎さんと鳥取砂丘を走る。
右はその教え子で現在は鳥取大学教員の関先生